

た。

ウイン以来の暑さの攻撃に堪へ兼ねた身體は、かくまで頼み方なく疲れて居たので、船で行けば大して世話もなしに行けると思つた君府下りも見合せることにして、翌朝ゆつくりと寝て居ると、コツ／＼戸を叩いてK博士が入つて來た。こちらから訪ねる筈で手紙を出して置いた人である。慌てゝ着換へて暫く話して居ると、昨夜のT博士が來る。新聞社の某君が來る。日本のTさんが來る。流石に涼しさを覺えたのも束の間で、またもや熱さが迫つて來る。此の地の人は人種上の關係から非常に東洋人、殊に此の頃は日本人に對して歡待を盡してくれるさうで、首相のチ博士からも來いといふ、公使になつて日本に來る筈であつた某氏からも招かれる。迎も宿で靜にしては居られぬから、けふは自分の處に來て居つたらといふTさんの勧めに従つて、橋を渡つたブダの或る精道院の中に連れられた。成程靜ではあるが不便でもある。

近所の温泉に行つて見やうなど、言ひながら、床の上に横になつてTさんから色々此の地の話を聞いて一日を過ぎた。

◇ ◇
翌日からはそれでも豫定中の必要事件たる訪問もし、見物も出来る丈けはした。二三日中にはと頼んだのも仇で暑さは一向に退きさうにもない。目苦しい程の電光と大雷鳴は時々あつても、大平野を潤す一滴の雨をも誘ひ得ない。かくしてあることの愚を知つて、明日は北に引き返さうと定めた前晩に、ウインで別れたKさんがついた。ドナウの油煎りにも弱らないで、元氣好く飛びまはつたKさんも、流石に君府行きは敢行し得ないで瑞西に外れたと